

「75年のストーリーズ Cauxのマジック」

1946年：トゥルーディ・トゥルーセル

「一つの階級だけでは新しい世界を築くことはできない」

トゥルーディ・トゥリュッセルは、戦争で引き裂かれたヨーロッパを癒し和解させるための場所とするようMRAのためにコー・パレスを購入した100人のスイス人とその家族の一人です。彼女はMRAの中心的人物であったフィリップ・モトウとエレヌ・モトウ夫妻の家で働いていましたが、彼女が28歳の時にどのようにコー・パレスを買い取る決定がなされたか、回顧録『Envers et contre tout』で次のように記述しています。

ある日、リーダーたちが私の働いていた家に集まり、廃墟となったコー・パレス・ホテルを購入する最終決定を下しました。

私は彼らのために昼食を作り、キッチンで洗い物をしていました。紳士的な客の一人がキッチンにやってきて、皆が私にも参加して欲しいと言いました。

私は彼に、皆さんは私に何も期待すべきではありません。今こそ金持ちが価値あることをする時だと言いました。私は関わりたくありませんでした。私は心の奥底で金持ちを非難し、多くの人々の不幸の責任は金持ちにあると考えていました。指一本動かすことなく欲しいものをすべて手に入れられる人がいる一方で、骨の髄まで働かなければならない人がいることが受け入れられませんでした。この不公平は私を恨みの気持ちでいっぱいにしました。

その客は出て行きました。彼は私にそう言われてかなり動揺していました。私はいつも物静かで控えめで、私が本当は何を考えているのか誰も知りませんでした。しばらくして彼はキッチンに戻ってきて言いました。「あなたの言う通りです。私たち金持ちは何かをしなければなりません。しかしあなたがいなければ成し遂げられないのです。一階級だけでは新しい世界を築くことはできません。」

「私たちにはあなたが必要なのです」と言われ、私は心を打たれました。

私は彼とともに応接間に行きました。そこにいた3組のカップルは、コー・パレスを買い取るために私財を捧げる準備ができていました。私は、時々滞在していたローザンヌから、古いホテルの窓に夕日が映るのを見たことがありました。仕事がない日には山に登り、コー・パレスを外から見たこともあります。それは荒れ果てて汚いものでした。私には彼らが何を考えているのか理解できませんでした。彼らには快適な生活を過ごすのに必要なものはすべて揃っていました。

彼らは神の導きに耳を傾けるために、「静かな時間」(彼らはそう言っていました)を持っていました。神と私は仲が悪かったのです。神が存在しないと断言したことはありませんでしたが、私は人生に深く傷つき、心の奥底では神は金持ちと善人しか愛さないと考えていました。みんな静かな時間をもっていました。私も黙っていました。すると、200フラン、つまり2カ月分の給料を差し出すべきだという考えが頭に浮かびました。それは私が看護婦になるための研修費として貯めていたお金です。私はこの考えが自分から出たものではないことは分かっていました。私はキッチンに戻り片づけをしました。でも、これは素晴らしいチャンスだ、もしかしたら神様は私も愛して下さるかもしれないと思いました。

私は3日間、自分自身と戦いました。もし「イエス」と言ったら、私にとってすべてが変わってしまうような気がしました。私はお金を差し出しました、そのお金は第1回会議の招待状の印刷代に充てられました。

私はコー・キッチンの責任者を引き受けました。素晴らしい仕事でした。すべてを一から準備しなければなりませんでした。石炭を使い調理しました。私たちは忍耐を学び、さまざまな人々と一緒に働くことを学びました。

トルディは看護師にはなりませんでしたが、生涯を IofC の活動に捧げ、何年もの間コーに住み、最初は厨房で、後にはコー・パレスの郵便局や交換手として働きました。

イレーヌ・デパウス



Trudi with one of the huge kettle used to make soup



Trudi in the internal post office in Caux



Trudi (left) in the Caux kitchen with Frank Buchman (1946)